



「病気を診ずして病人を診よ」という高木兼寛博士(慈恵医大創設者)の言葉は、病人を人間として見つめ、その悩みや苦しみが分かる温かい心を、医師に求めています。昨今、カルテも紙面からコンピュータに変わりました。レントゲン写真も画面上に表示されるなど、カルテの電子化がすすんでいます。今日も外来で、必死にコンピュータを見つめ、慣れない手つきでキーボードを叩いています。ふと、患者さんに目を向けると「先生、画面よりも私を診て下さい」と、訴えるような表情に気づきます。慌てて患者さんに向かい、お話を聞きながら診察し、再びコンピュータに向かいます。電子化され複雑化した医療の進歩は、医師が病人を人間として診る時間を益々短縮し

## 若い医師に患者と話す時間を

ていきます。ベテランの医師は、患者さんとの長い歴史があり、お互いの信頼関係が、比較的短い診療時間でも我慢して頂けますが、若い医師は大変です。診療時間は長引き、疲労し、ストレスがたまり病院を辞めていく人が増加し、現在の勤務医不足の状態を招きました。若い医師は、患者さんから多くの事を学び、信頼されることから、生涯をかけて成長します。私がそうであったように、我が子また我が弟妹のように、温かく見守って育てて欲しい。平成院長の切なる願いです。

欧米と比べ日本では、経済面から、医師や看護師数を政策的に抑制してきたことが現在の事態を招いた原因です。政権が変わり、医師不足を補う政策が実行されるとのことです。給料の増加よりも、もっと患者さんと話が出来る時間を医師に与えて欲しいと望んでいます。

(公立南丹病院長 梶田芳弘)

|| おわり